

令和2年度 第31期川崎市青少年問題協議会
第3回協議題・調査専門委員会 会議録

○日 時 令和3年2月9日（火）10時00分～12時00分

○場 所 川崎市教育文化会館4階第2学習室

○出席者

(1) 委員 8名

柴田委員、香山委員、丸山委員、米田委員、小松委員、館委員、前川委員
芳川委員（オブザーバー）

(2) 傍聴者

なし

(3) 事務局

中村室長、柿森担当課長、戸田担当係長、小宮職員

○配布資料

資料1 第31期青少年問題協議会 協議スケジュール（案）

資料2 第31期青少年問題協議会 論点マインドマップ

参考資料1 こども文化センター指定管理仕様書

参考資料2 こども文化センター運営の手引き

参考資料3 児童館ガイドライン

1 開会

- ・会議趣旨の説明
- ・配布資料確認
- ・会議公開についての説明
- ・会議成立についての説明

2 議事

(1) 第31期川崎市青少年問題協議会の協議内容について

柴田委員長：皆様おはようございます。早速、協議内容に入ってまいりたいと思います。

本日の協議題・調査専門委員会では、来月3月に予定しております全体会に向けて協議題、具体的には意見具申書のタイトル案を決めたいと思っています。なお、前期の第30期の協議題は「現代を生きる青少年の主体的な社会参加を考える」となっています。

前回までの本会議での議論をもとに事務局の方で資料をまとめていただいておりますので、説明をお願いできればと思います。

事務局：（資料及び参考資料について説明）

柴田委員長：ありがとうございました。それでは、今御説明いただいた内容をもとに、協議題の決定に向けて議論を進めたいと思います。その前に、先日、2月1日にこども文化センターを、私を含めて4名の委員で視察してきましたので、事務局にて作成いただいた視察報告書を確認していただきながら、簡単に各委員から視察の感想や気づいた点などを皆様にフィードバックしていただければと思います。最初に米田委員、お願いします。

米田委員：貴重な機会を設けていただき、ありがとうございました。今回は3館を拝見しましたが、規模や立地条件など、それぞれに違いがあるので、一律な取り組みというのはなかなか考えにくいことを、改めて実感しました。

それと、こ文運営の手引や指定管理仕様書を、この機会に見たのですが、相当考えて作られているので、それぞれ差異がある館の中に、相当な機能が盛り込まれている印象を持っています。館の運営体制を見ると、館の管理、子どもとの関係づくりや声かけ等の対応と、様々なプログラムの企画実施、そして運営協議会という形で地域住民とコミュニケーションを取りながら運営をしている。子どもたちの運営協議会があって意見を出す機会がある。これを何人で運営していらっしゃるんだろうと伺ったら、結構、人数が少なくて驚きました。とはいえ、スタッフの方々が強い思いを持ってやっていたら、感じましたし、今までの協議会提言を踏まえて、若いスタッフさんがいる館もあったので、これが中学校区に1館あるのは川崎市の財産で、ここをベースに考えて

いかないと駄目だと改めて感じました。

柴田委員長：ありがとうございました。では、丸山委員、お願いします。

丸山委員：視察に参加させていただいて、ありがとうございました。やっぱり聞くのと見るのとは全然違ったなと感じました。正直、こども文化センターを見るまでは、ちょっと言い方は悪いですけども、あまり機能を果たしていないのかなというところが少しあったんですけども、実際に行くと非常によく機能されているというか、子どもたちもたくさん来て、色々なことに参加しているみたいですし、あとは、やはり地域に非常に密着しているなということも分かりました。あと印象に残ったこととして、こ文ごとにすごく役割が違うんだなというのがよく分かって、特に高津と下平間は地域に密着型というか、子どもたちが本当によく出入りをしていて、公園を使ったり、公園に遊びがてらこ文に寄ったりとか、スタッフの方々も子どもたちのことをよく分かっているというような関わりの形だとか、あと小杉こ文はやっぱり都市型というか、新しい世代の家族が来て、地域の拠り所を求めてこ文に来ているというのはよく分かったし、そこですごく関わりができたとか、子育てについて色々相談したりとか、ああ、なるほど、こういう風に機能しているんだなと、非常によく分かりました。あと、平間こ文が印象的でして、平家建てで非常に見通しがよい造りになっていて、子どもたちの様子がよく分かる環境になっていたりとか、あとは地域のマップみたいなものにもすごく興味があって、子どもたちが自分の地域を知るといのはすごく大事なことなんだなと。なかなか自分の地域のことって知らないですよ、どこに何があるとか、すごい近くなのに、あの建物の役割が全然分からなかったりということが普通にある中で、ああいう風にちゃんと詳しい地図を子どもたちで作って、ここに何があるとか、あそこに何があるとか、ここの歴史はこうだとか、地域交流と成長はどうつながるんですかみたいな、私は前々回だけにそもそも論を言ってしまったんですが、でもこうやって地域社会に溶け込んで大人と色々な対話をして、大人に色々なことを教えてもらったりとか、あるいはまたここに来て叱られながらとか、そういうことを通して成長していったり、そして参加して褒められたりすることによって自己肯定感が高まるのかなと、少しつながった感じがしました。

柴田委員長：ありがとうございます。では、館委員、お願いします。

館委員：私自身は川崎市民で幸区に住んでいるので、子どもを連れてよく北加瀬のこども文化センターに行っていたんですけども、やっぱり子どもが大きくなってきて正直使わなくなったなというのが、うちの場合はそういう状況だったんです。ですから、私自身、こ文に行ったのはすごく久しぶりで、しかも自分の住んでいない地域のこ文を見せていただいたということで、非常に貴重な経験だったなと思

いました。感じたところなんですけれども、地域ごとの特色はあるにしても、利用されている形態というのは、それほど大きくは変わらないのかな、と感じました。やっぱり乳幼児を抱えている保護者、当日はお父さんはほとんどいなかったですけれども、お母さんがメインで、赤ちゃんとか幼稚園児を抱えているお母さんが多かったなという印象です。

たしか前回のこの会議の場で、我々世代があまり社会参加していないのではないかみたいな御意見が出たと思うんですけれども、こ文の方々にヒアリングをさせてもらって、実際に我々のような保護者世代は利用されているんですかねというのを質問させてもらったんですけれども、やはり利用実態はほとんどないということで、使っているのは若いお母さんかおじいちゃん、おばあちゃん、シニア世代の方が中心だということで、前回、この会議で投げられた疑問というか、課題がそのまま反映されている形なのかなというのが私の正直な感想でした。では、ここから先、こども文化センターをどう活用するかというのは、何のためにそもそも活用するのかみたいな話に多分なってくるのかなとは思ってますけれども、その1つのキーワードが我々のような保護者世代というか、我々世代がどういう風に社会参画を考えるのかという、その意識づくりというのがやっぱり改めて大事なのかなと、私はこの視察を通して感じました。以上です。

柴田委員長：ありがとうございます。私も参加させていただいたんですが、まずはこ文の地域性というものが本当にあるなということ、まざまざと感じました。それから、時間帯によって、午前中やお昼は乳幼児のお母さん、放課後になってくると小学生、中学生が増えてきて、夜間になると、子どもの活動に支障のない限りにおいては地域の大人、特に高齢者のサークル活動が多いという風に伺いましたが、そのように色々な世代の方たちが時間帯によって順番で使っていらっしゃるのだなと思いました。

第29期の青少年問題協議会では、こ文が地域づくりのハブ組織の機能を果たすようにというような提言がなされていたり、それから、各館に運営協議会がありますけれども、この運営協議会も青少年問題協議会の提言によって各館につくられたのだという経緯も初めて知りました。この運営協議会については、地域によっては学校の教職員も入っているところもあったり、それからあと、例えば一番最後に訪れた小杉こども文化センターは、本当に駅ビルの最新施設のこども文化センターだったんですけれども、ここでは新旧の住民の橋渡しということが課題になっているというような話を伺いまして、地域づくりということと子どもの参加、それからこ文がハブ組織になるような仕組み、仕掛けというのをやはりする必要があるのではないかと感じました。以上です。

では、今皆さんに視察の所感を述べていただいたり、事務局から御説明いただいた点なども踏まえまして、協議会について議論をお願いしたいと思います。まずは自由に御意見などを挙げていただきたいと思います。

米田委員：事務局で前回議論をまとめていただいたので、相当、時間短縮ができたと思います。ありがとうございます。その上で思ったのですが、前回の協議会の意見具申書の最後で、コロナに触れた部分がありました。ちょうど前期の意見具申作成中にコロナの流行が始まり、今回の協議会の意見書は、「Withコロナ」の中で議論をしてまとめるものになります。コロナ禍の混乱の中での青少年の様子や、青少年施策の在り方、今後について、触れないわけにはいかないだろうと改めて思いました。そういう視点で、事務局のまとめを見ると「Afterコロナ」についてはあるのですが、コロナの真っ最中について触れた部分が入っていないので、そこは何か盛り込む必要があるというのが一つです。もう一つは、「Withコロナ」での青少年の問題で言うと、青少年の社会関係資本はどうなっているかだと思うのです。コロナ禍においても色々なつながりが持っていれば、その中で何とか、出かけていけなくてもチャンネルでつながっていたり、コロナ以前の家族関係が影響しているとも感じています。社会関係資本という視点も入れられたらいいと感じました。

柴田委員長：ありがとうございます。「Withコロナ」の視点や、それから青少年の社会関係資本、ソーシャルキャピタルの視点も入れたらどうかという御意見でした。他に御意見などがありましたらお願いします。

舘委員：事務局でまとめていただいた資料を見たときに改めて、5W1Hのうちの「Why」ですよね、これがやっぱり大事なのではないかなと思っていて、どこで(Where)、誰が(Who)、何を(What)、どのように(How)、いつまでに(When)するのかというのは、その全てが「Why」があってこそだと思います。青少年問題協議会は、名前はちょっと仰々しいんですけども、別にそんなに問題とまで言わなくても、我々としてどういう思いで青少年に社会参画を促していくかみたいなことを考えてもいい場だと思うんですね。そのときに、ではこども文化センターをどう活用するかというのは、一体何につながっていくのだろうかということは、会として意識合わせというか、皆さんの思いを一致させる必要があるかと思います。私はずっと長くPTA関係のことをやっているというのもあって、何で我々が子どもたちを、例えば色々なイベントとか、こ文とかに連れていったりするのかなどずっと思っていたんですけども、私は実は出身は川崎ではなくて岐阜の方なので、正直私が川崎に越してきたのは2010年ぐらいで、まだ川崎に住み始めて10年ぐらいしかたっていない新参者なんですけれども、やっぱり子どもたち、あと青少年にあれやこれや言いたくなる根本的な思いは、川崎に住み続けてほしいというか、「心のふるさと」ではないですけども、川崎というまちを愛してほしいし、そこにずっと気持ちよく住んでほしいというのが根本としてあるのではないかなと思うんです。でなければ、例えば川崎でやっているお祭りに行ったりとかしないですよ。保護者からしたら、子どもをお祭りに連れて行くというのは結構しんどいですし。だけれども、川崎は色々なイベントをやっているし、それこそ150万の人口がいて、色々なことをやっている人がいるという

ころで、そういう人たちとつながりをつくっていくというのも、先ほど社会関係資本という話が出ましたけれども、人だったり、物だったりというリソースに子どもたちをより触れさせて、やっぱり川崎というまちのよさを知ってもらって長く川崎に住んでもらえるといいな、みたいな希望が恐らく無意識下にあるのではないかと、私はずっと思っているんです。そういうことを踏まえると、では、川崎のまちにずっと長く住んでほしいと思うためには、まち自体がよりよく発展していったほしいなと思うし、だからこそ、例えば「こ文を活用したイベントをやってみよう」とか、「色々な人を集めよう」というところにつながるころがあるのかなと。まとまりがなくて申し訳ないですが、改めて子どもたちに対しての社会参加を促す目的、意義みたいなものを議論できるといいなと思います。

柴田委員長：ありがとうございます。社会参加を子どもたちに促すのはなぜかという、そもそもの意義を皆さんと共有したいということです。他に皆様から御意見などがありましたらお願いします。

前川委員：先ほど「Withコロナ」における子どもたちの話というのが出てきましたが、私も川崎市の子ども会議でサポーターを長くやっています、今年度のテーマとして、まさにコロナの話を子どもたちに振ったんですけれども、最初の会議、ちょうど緊急事態宣言が明けた6月のときには、子どもたちにはすごく鮮明に色々な出来事を話してくれたんですけれども、もう今になるとそのときのことを案外忘れてるんですよね。意外と、生活にあまり変化がなかった子たちも多かったのかなという気もしています。なので、このコロナで一番被害を受けたのは大学生なのではないかなというのが僕の中では肌感としてあって、特に一人で上京してきて、延々とパソコンの画面に向かって一人で講義を受けたりとか、やっぱりああいう大学生たちが一番悶々としていたのかなと。特に川崎の場合、近隣自治体にも川崎市内にも様々な大学がありますから、やっぱりそういう学生たちが多かったのかなと。そういう学生たちの受皿がどこかであるといいのかなということも思っています。

あともう一つ、先ほどからこども文化センターの話が出ていますけれども、視察された委員の皆様方からも御指摘があったように、こども文化センターの職員自体は数としてはそう多くないので、来ている子どもと来館している職員との関わりというのがどこまでできるのかなと思う部分はあります。要は社会参画を促すまでのそういったものの関係性にももちろん至っている部分もあると思うんですけれども、非常に難しい部分があるのではないかなと僕は思っています。日々のルーチンワークとか事務仕事も多くて、そういったところもこ文の職員に求められていることは私が中にいても感じましたので、むしろそういう意味で言うと、今回の議論からは少し抜けていますけれども、「わくわくプラザ」ではもっと低学年の子たちから意識づけをしていって、それがこども文化センターを利用する例えば中学年、高学年のあたりの子たちにどう作用していくのか。そして、そこにさらに中学生、高校生のときにどうなっていくの

かという、そういった全世代的な話をしていけないといけないのかなという気がちょっとしています。圧倒的にわくわくプラザの方がやることというか、スタッフも多いですし、もちろん子どもたちも多いんですけども、その分、よりスタッフと子どもの関係性は密になっていると思うので、むしろそういうところで促しができるのかな。逆に言うと、わくわくプラザに今その機能が求められていないのではないかなという気もしているので、むしろそういったところからもっと地ならしする必要があるのかなというの少し感じています。

柴田委員長：ありがとうございます。わくわくプラザに関しましては、今回は視察はできなかったんですけども、放課後子供教室を川崎市ではわくわくプラザという名称で運営しているという理解でよろしいですか。

事務局：わくわくプラザにつきましては「放課後児童健全育成事業」と「放課後子供教室」の両方の仕組みを取り入れた、放課後に小学生が過ごす居場所と考えていただければと思います。「放課後児童健全育成事業」というのは保護者の就労等を前提条件としていますが、川崎市のわくわくプラザは、保護者が就労していなくても自由に利用できるものとしています。

柴田委員長：ありがとうございます。色々と御意見が出てまいりましたが、他の委員さんはいかがでしょう。

香山委員：私個人は、こども文化センターに勤めていたことがあるので、そのときのキャリアとか、子どもとの関わりとか、地域住民の方との関わりとかを基本に、あと、前回、前々回で、何をもって青少年問題協議会のテーマとしていったのかなと考えたときに、いわゆる青少年の社会参画のステージを用意して、彼らが主体的に関わるために我々モデルとなる大人たちが何かできることはないかということ具体的に色々な角度から考えていたような気がするんです。そのときに、私たちが捉えていた青少年というのは、どちらかというと高校生から大学生、そして20代ぐらいの、要は次世代の川崎を支えていく世代の方たちがより川崎市民として素晴らしい川崎をつくっていきけるための1つの取組とか、ヒントとかモデルとしてここでは青少年の問題という、悪い意味ではなくて前向きな課題ということでやってきた気がするんです。そのときには当然、その場として、こども文化センターというの大きな一つの拠点として当然入っていました。だけれども、あまり時間もなかったし、こども文化センターを活動の拠点として具現化するためにもう少しこういう環境を整備しなければいけないのではないかな、みたいなどころまではなかなか至らなかったように思っているんです。こども文化センターに勤めていた身からすると、確かに色々な機能があって、それはそれは忙しくて、職員や、それからまた地域の方たちの支援もいただきながらやっていたんですけども、午前中は乳幼児のママさんたちが来たりとか、それから、高齢者の方たちが生涯学習の活動拠点として御

利用されていたり、要は小学生、中学生が学校へ行っている間だから、そういう意味では子どもたちがいないから、そこで乳幼児さんが入ったり、そして高齢者の方が入るわけです。子どもたちが学校から帰る頃になると、小学生、中学生ぐらいが入ってきて、遅くなって、先ほど話があったように高齢者の方がまた生涯学習の活動拠点としてみたいな感じの中で、サイクルとして人の流れはあったような気がするんですね。勤めていた側の悩みとして、中学生から高校生、ましてや大学生となると利用者が激減するわけです。そこでつながりたいんだけど、さっき前川委員がおっしゃっていたけれども、なかなかそこにその時間帯に入ってこられる高校生、大学生というのはない。地域の方との関わりの方としては運営協議会があるわけなんですけど、それも高齢化されていて、本当に同じ方がもう何度も何度も色々な地域に出てきて、またあのおじちゃんと会うのかという感じがあって、子育てが少し落ち着いてきた世代、30代後半から60代ぐらいまでの方たちがどんどん地域活動の主役として入ってくれるといいんだろうけれども、忙しくてなかなか入ってこないんだよなと、70～80代のおじいちゃんたちがいつも私におっしゃっていました。青少年の方たちが大人のモデルとして、青少年の社会参画のモデルとして色々関わってほしいということであると、やっぱり30～50代の方たちがどうしても欲しいなという感じがあって、もちろん高齢者も必要なんだけど、そういう感覚が正直ありました。

それから、こども文化センターは結構部屋がいっぱいで、それプラスそういう人たち、青少年が集まったりするのは、どこを使うのとか、どの時間帯を使うのとか、勤めていた側からするとそこが問題なんです。そんな場所や時間帯はないじゃん、という風に感じることはありました。だから、今のところ、割とこども文化センターありきで議論が進んでいるんだけど、それはそれでいいと思うんですが、なかなかこの御時世、こども文化センターを増築していくとかそういうことは難しいということで、今あるものを有効活用するしかないとなったときに、できることは何だろうか、そういったところも少しずつ考えながら、例えばテーマを絞っていくのであれば、それをぜひ考えていかなければいけないのかなという風に思います。

柴田委員長：ありがとうございます。他に御意見などがありましたらお願いします。小松委員、いかがでしょうか。

小松委員：前回ちょっとお話した学校の現状というか、私が感じていることをお話ししますと、今もコロナの中で学校は動いているわけなんですけれども、小中学校ともに今ちょうど卒業、入学に向かっている時期なので、そこで色々連携をしているところなんですけれども、今までにやってきたこととは違う流れをどんどん入れざるを得ない状況なので、それが本流なんだということはもちろん職員も理解はしているんですけれども、これまでやってきたことがどうしてもあるので、なかなか前向きな考え方は、大人には少し難しいと、私の身近では

感じているんですが、子どもたちは夢とか目標を持ってやろうとしている子が多いので、どんどん新しいことをやっていこうとか、チャレンジしていこうとか、感謝する言葉を表わしていこうとかという感じがすごく伝わってきます。本当にこれからの世代の子たちなのだなと思います。いま、教育現場でもSDGsのことなんかがよく取り沙汰されるんですけども、私は自分的にもっともっと真剣に考えなければならないと思っていながらも、切実にまだ考え切れていないところもあって、先日もNHKの番組でちょっとショックを受けたんですけども、こんなになっていくのかなという、食料の在り方を水分の移動なんかを表わしていた番組で、どこまでそれをどう理解していいかも自分の中で足りなかったんですが、でも子どもたちがそのことを翌日話題にしていたり、そういえば、市内で理科の発表会のようなものを年に1回ぐらい、環境教育ですか、そういうものを見に行ったときに、去年その会合に行ったときに、小学5年生の女の子がタブレットを使いながらそういうのを発表していたなというのを思い出しまして、実は子どもたちはすごい勉強しているんだなど。私たちが受けてきた教育とはまた全然違う教育が進んでいるのは当然なんですけど、また来年度から、今、市内の市立学校に全部GIGAスクールの構想がどんどん広がって行って、まさに劇的に変化していくということを考えると、学校現場としてはすごくそれに戸惑いを感じる面もありますけれども、期待できないという感じです。子どもたちはきっと色々なツールを使いこなしたり、それをますます発展させたり、色々な力を発揮してくれるのではないかなというイメージがあるので、感染症対策をしっかりしながら様々な活動に取り組まなければならないという思いは、子ども、御家庭はかなり強く持っていらっしやと思うし、今のような環境が逆にチャンスにつながっていくきっかけになるのかなというイメージは学校現場としては感じているところです。

柴田委員長：ありがとうございます。今、小松委員からお話があったように、「Withコロナ」とか「Afterコロナ」というところと、それから、全生徒、児童にもタブレット端末の配付がもう本格的にこれからGIGAスクール構想として始まりますので、そういった中での新しい社会参加の在り方であるとか、こども文化センターに視察に行ったときも、子どもたちの館への要望として、Wi-Fiをつなげてほしいという要望をたくさん見ました。SNSとの付き合い方も1つ視点に入るのかなと思いますし、とはいえ、実際的な社会参画といった対面での子どもたちの視点と、その両立というか、両立と捉えていいのか、それを相乗効果として仕組みをどうつくるかというような議論も必要かなと思います。他に皆さん、いかがでしょうか。

米田委員：私は、こども食堂ネットワークにも関わっていますが、コロナ前は、事情のある子も、そのことが周囲に知られずに参加できるように、いわゆる「ポピュレーションアプローチ」と言われる、誰でも来てもいい形で活動していた団体が多かったです。なので、実際にどの子がどんな事情を抱えているかは、あまり

分からない。月1回ぐらいで集まって楽しく食事をしたり、遊んだりというような場づくりの活動が大多数でした。県内には常設に近いところもあります。コロナ禍で集まって食べるができなくなっても、場を続けようとされている団体は川崎市内にもあり、食品やお弁当の配布という形に活動を切り換えたんですね。すると、今まではつながれていなかった子ども、親子と出会えたという話が出ています。子どもの状態を例えば信号で例えたとすると、今までは青信号と黄色信号ぐらいの子どもとつながれていたのが、黄色信号の子が赤になってきているとか、赤の子がつながれてきました。社会参加やネット活用にも、家庭ごとに格差があるので、コロナの中でも、そんなに困ってなくて記憶が割と薄れていると言える子どもと、今もまだものすごく大変な中にいる子ども、その差がものすごく広がっている。加えて、今は人の接点が薄いので、差があることもお互い自覚しにくいと状況ではないかと思います。

こども文化センターやわくわくプラザといった日常的な地域の場合とは違う、市民が集まり場づくりをしている市民活動が市内にはたくさんあって、川崎市から助成金支援もされていますが、そういう活動の中で見える子どもの姿や、課題に感じていることを聞いてみると、社会参加や居場所、つながりというテーマの中で、考えるヒントがあるのではないかと思います。

丸山委員：僕も同じようなことを考えていたんですけども、Zoom相談とか、オンラインを今すごく活用していますけれども、もともと相談という仕事をしていて、オンラインをやることになって、例えば非行の子どもたちとか、学校になかなか行けない子どもたちとつながるようになってきたんです。それで、顔を見せなかったりとかしているんですけども、でも声だけのやりとりとか、なかなか地域に出たくても出られない子たち、学校に行きたくても行けない子たちが、逆にオンラインをすることでつながり始めているということに面白さを感じていて、そういう風に活用ができたらいいな、と考えています。だから、例えば子ども発信でオンラインとかZoomをやって、それでみんなでゲームをしたりとか、顔を見せなくてもいいからちょっと参加してみないと誘ってみたりとか。そうすると、そういう子たちが参加しやすくなったりとか、やっぱり不登校の子たちは本当に誰とも関わっていないというか、ましてや地域なんて全然頭になくて恐怖でしかない状況という、大体そういう子たちが多くいんですけども、そういう形で、オンラインでの参加でいいとなると、クイズでもやろうよとか、地域の中でゲームみたいなことをやってみようよ、みたいな形で気軽に誘う場にちょっと活用できたりとか、そういうイメージはあります。

柴田委員長：ありがとうございます。不登校のお子さんなどにも視点を当て、オンラインが普及しているというのをチャンスと捉えて、そうした子たちを社会参加につなげるような提案をしていけたらということですね。

前川委員：今の話に少し関連するのですが、子ども会に参加をしている子たち、もしくは

もっと言うとも中高生ジュニアリーダーの子どもたちの質が少しずつ変わってきているなというのは感じています。私、もしくは私よりももっと上の世代だと、割と学校に居場所がなくて、こういう活動を一生懸命頑張ってきた、例えば、定時制の高校に通っているから日中暇で、だから、子ども会のレクリエーションとかをひたすら日中考えて土日に披露するとか、高校の通学路の途中に色々な区の仲間がいるから、その仲間に来て高校には行かないとか、そういった「普通に学校に通う」タイプではない人たちの方が多かったんですけども、ここ最近の中学生、高校生のジュニアリーダー、子ども会の子たちを見ると、割と学校でも学級委員をやっていたり、委員会の委員長をやっていたり、部活動の部長をやっていたりとか、いわゆる学校内でもリーダー格として多分に活躍している子が子ども会に来て頑張っている。だから、学校の活動も一生懸命頑張っているんで、学校行事と子ども会行事がかち合っちゃったときにちょっと取り合いになったりとかするんですけども、今の話を聞いていると、まさにそういう人、不登校とか何かしら問題を抱えている子たちの居場所にもなり切れていないのかなと思うんです。子ども会のパイが少なくなってきたので、恐らくそういった現象が起きつつあるのかな、と。だから、逆に言うと、問題のある、本当なら地域への社会参画の場として子ども会とか地域があるんですけども、そういうのが多分もう閉ざされていて、全体的なパイが少ないからこそ見えづらくなっているのかなという気がして、今の話を聞いていて、ああ、確かにそうだなと思いました。

柴田委員長：ありがとうございます。子どもにとって社会参加の場をたくさん持つ子とそうではない子がいる、そこにもある種の格差が生じてきているということでしょうか。他に御意見などがありましたらお願いします。

館委員：今の前川さんの話を聞いてちょっと感じたところがあって、いわゆる学校の中での優等生と呼ばれるような子どもたちは、大人からの期待値がどうしても高くなると思うので、例えば子ども会だったり、色々な場でもリーダーとしての役割を期待されるという面はどうしても出てくると思うんですね。本人たちも、やはり期待されれば応えたいくなるというのが人間の本質だと思うので、そういったことで色々マルチに活躍する子が一定数出てくるというのは、ある意味、時代の流れなのかなと思いつつも、では、それ以外の子どもたちが逆に何でそういう場に参画しなくなってきたのかなと思うと、やっぱり個性はあるので、そういったリーダーというものに全く興味がないという子も絶対いますし、私はこんなことをやりたくないんですという子は正直いると思うんですね。だとすると、我々大人がやっぱりそういう子どもたちをいかに発掘、そういう言い方もちょっと失礼な言い方になってしまいますけれども、うまく活躍してもらおう場を与えるかとなると、ある意味、子どもたちが本当に心の底から楽しいと思えるようなことを大人たちがもう少し自由にやらせてあげられるとよりいいのではないかなと思うんです。それはどうしても、今の子ども会だったり、例えば行政が企画するイベ

ントとかはもう既に有り物ですし、こういうことをやるというのは決まっていますので、やること前提で、それをやれる人を探してくるというような形にどうしてもなってしまうんですね。例えばそれは川崎市は青少年フェスティバルとか色々とやりますけれども、青少年フェスティバルも予算がかなり限られている中でやるので、どうしてもなかなか思い切ったことができないという台所事情はありますけれども、ただ、大枠としてのこんなことをやるみたいのがやっぱり前年踏襲でずっと流れてきている中で、思想があってやるというよりは、こういうことをやる前提で、それをやれる人だけが来るみたいな感じになってしまっているのです、そうすると、どうしても広がっていかないんですね。参加したいと思える人が広がっていかない。だとすると、子どもたちというか、高校生、大学生が、今この時代にまさに自分たちがやりたいと思っている、本当に興味から出てくるような、本当に心の底からやって楽しいと思えるものを大人がバックアップするような場というんですかね、単純にそれは、もちろん場所を提供するというのも大切ですけれども、それこそ人のつながりだったりとか、あとはお金ですね。そういうところは行政にもちょっと頑張ってもらわないといけない部分ですけども、そういうところをバックアップすることで、子どもたちが本当に心の底からやりたいと思っている、興味本位でも私はいいと思っているんですけども、そういったものをもう少し自由にやらしてもらえようような機会をつくってあげられると、先ほど私が冒頭に言ったような、より川崎市がいいなど、川崎市に住んでよかったなと思えるようなまちになって、子どもたちもより社会参加しやすくなる、そういうまちになっていくのではないかなと、改めて思いました。

柴田委員長：子どもたちが本当に自ら興味を持って参加したいなと思えるような場づくりが必要だということですね。他に御意見などがありましたらお願いします。

前川委員：今、館委員がおっしゃった取組というのは、前の期で視察した「川崎ワカモノ未来PROJECT」というのが近いのかなと思います。いわゆるメンターの大学生が後輩の高校生をフォローするという形でやっているのです、あれがさらに地域の大人、地域に根づくような形になっていくといいのかなと、私はすごく思います。例えばそういうのが、今のカワプロみたいなものが、もっとこ文でできたりとか、そういう形で広がっていくといいのかなと思います。こ文に行くと何か新しいことができる、そういう大人がいるみたいなのがいいのかなという気がしますね。

私はあと3年すると30代になってしまうんですけども、20代後半になって思ってきたのは、子ども会とか色々な組織に入っていて、僕はこの先、誰が見本になるんだろうというのはすごく思っていて、子ども会の役員さんとかはみんな60代、70代とかなので、この間、僕は一体誰が見本や手本になるのかなみたいな、たまに地域の町内会で若い方が会長とか、子ども会の会長でやったりとしていますけれども、その方とも僕は20年ぐらいの間があるし、ロールモデルが地域の中でも見つけづらいなというのは思うので、今日の前半

の方の議論でもあったように、30代、40代などの色々な方がいる中で、そこで中高生が何か自由にできるというのは確かにいいな、と私は思いました。

柴田委員長：ありがとうございます。地域の中にロールモデルを見つけられる場をつくるというのも1つ重要な視点ですね。

事務局：芳川先生は、これまでの議論を聞いていて何かございますか。

芳川会長：川崎では前から「おやじの会」がかなり有名だったんですけども、今はどういう状況ですかね。

小松委員：うちは西高津中ですけども、「おやじの会」はすごいですね。小学校3校からうちの中学に上がってくるんですが、下作延小、高津小、久地小学校、それぞれに小学校の「おやじの会」があって、西高津中にも「おやじの会」がありまして、さらに4つの連合の「おやじの会」というのもあって、コロナ禍になる前は頻りに集まっていた。私も参加していましたが、すごく楽しかったです。おとし、川崎も台風の被害を受けたときに、西高津中の学区はそれぞれ、下作延小も、高津小も、久地小も、そして西高津中も、川沿いの学校は全て避難所になったんですけども、そのときも、小学校の避難所の片づけに関してはすぐに「おやじの会」が飛んで行って、連合の「おやじの会」もあっちこっちに行ったりして。だから、本当に亡くなった方も出て大変だったんですけども、そのときの災害復興も本当にみんな手弁当で来て、何かやることはあるかということやってくれていましたね。任意の会だからこそでできるだろうなど。皆さん、レクリエーションでソフトボール大会を開いたりとかということもしていますね。

中学校の中で校舎の工事等が原因で校庭がかなり狭くなったときがあって、小学校のグラウンドを借りたりしたこともあったんですけども、そうすると、小学校に何か恩返しもしたいと思って、小学校の校庭の側溝整備というんですか、雨で砂がたまりますよね、ああいうのも「おやじの会」で結構やってくれと聞いていたので、逆に「おやじの会」と中学生で協力してできないでしょうかねなんていう話もしていたんですが、結局コロナになってしまってやはり結びつきができなくなってしまっている状況で、今は多分どの活動も止まっている感じだと思います。

あとは夜間のパトロールなんかもしていました。みんなで月何回か集まって9時ぐらいを目途に、ちょうど塾帰りの子たちがいるような時間に皆で巡回しながら、2班ぐらいに分かれて。それも連合の「おやじの会」などがやっていたね。他の学校のことは詳しくは分からないですが、恐らく似たような感じではないかと思います。

芳川会長：ありがとうございます。川崎は、そういう意味では大分前からおやじの会があ

って、ものすごくいい形で、今、小松委員が言ったように、自分たちで考えてこういうことをやっていくんだと。それが最も成功した例なのではないかなという感じがして、それを例えば青少年の方に、私たちはどう持っていったらいいのかとか、あと、先ほど館委員がおっしゃったように、保護者、大人としてそれをどういう風に一緒に巻き込んだりとか、何かそこがすごく、皆さんの意見を聞いたときにイメージとして出てきたような気がしましたので、参考になるものがあるといいなという気がしました。

香山委員：はい。私は今東京に勤めているんですけども、東京はOBが全部残っているんですね。どんどん残ってましたね。だから、レクリエーションを含めて、地域の中の一太という大げさだけれども、団体になっていて、何かイベントがあるとどんと来て、同じユニホームを着て、おやじ、やったぜみたいな感じで、なかなか楽しそうだなと。

事務局：少し補足すると、まず日本での発祥の地が川崎だと言われている「おやじの会」というのは地域密着型のおやじの会で、今で言うと市民館が地域セミナーを母体にして、おやじの会『いたか』というのを作って、それが日本初の「おやじの会」ではないかと言われている。色々な先生方が論文も書かれていますけれども、そうした地域型の「おやじの会」が始まったのは30～40年ぐらい前の話です。

女性の社会参加と生涯学習、社会学習の運動から出てきたのが、あれはお母さんたちが旦那を引っ張り出してきて、地域につなげる場をつくろうとあって、実際に集まったら何もできなくて、少しずつコミュニケーションを取りながら、お母さんに尻を叩かれながら徐々に地域に出て行って、みたいな活動をし出したのが第1期のおやじの会の活動みたいのがあって、それが『いたか』とか、『ま・いい会』とか市内に幾つかできてきて、おやじの会のサミットみたいのを、全国サミットをやると言ったのが25年ぐらい前で、そうした会が市内に広がりながら、先生がおっしゃったようにPTA、学校を起点とした新しいタイプのおやじの会の活動がその後、波として出てきて、それが今幾つかの学校で進んでいる状況です。ですので、多分、潮流としては2つの「おやじの会」があるのかなと思います。

米田委員：今聞いていて思ったのですが、そういうお父さん世代の男性がつながりを持つるのは、子どもがいることで地域とつながる機会があるからで、以前の間人関係は、親族か会社の人か昔の仲間くらいの状況だったと思います。異なるチャンネルができると、しがらみなく取りあえず一緒に飲めるとか、人と人として出合った仲間として付き合える場が、家の近所にできた感じなのだろうと思います。そういうところに至る子ども時代からの人間関係の変遷を見ると、大体家族から学校、そして御近所につながりができるかどうかがかかれ道になっていて、そこでつながりが生まれないと、家族か習い事だけの人間関係が、そのままスライドして、高校に通うようになって行動範囲だけは広くなっても、人

間関係はそんなに広がりがなく、部活動や好きなことがあれば、その縁はあるけれども、人と人として出会って仲よくなるというチャンネルが、成長するに従って細くなるというか、なくなっていくのだと思います。行動圏が広がるのと反比例するように少なくなる。

だから、自分に子どもができて、やっと人の縁が広がる状況で、子どものいない人はその縁すらないまま年齢を重ねて、地域の中につながりがなく女性の後ろについて初めて老人会に行く。好きでもない俳句をやらなければいけないということになるのですね。だとすると、子どもがどれだけ自分の生活圏の中で顔見知りを増やせるか、という話だと思っていて、顔見知りの中に、自分が知らなかったタイプの大人がいればいるほどいい。色々なパターンの人間に触れる機会が、そもそも無い気がしています。さっき言った子ども食堂は、色々なタイプの人たちに触れる1つの機会を、大人が自発的に集まってつくっているところだと思っています。大人の縁が薄い中で、子どもを気にかけている大人同士が子ども食堂や居場所づくり活動で接点を持ち、一緒に活動しながら汗をかいて、まず大人同士で仲間ができる。そうすると、色々なことをやって生き生きしている大人がいるところに、食べる行為を触媒にして子どもと顔見知りになる。まずは「顔見知り」の種をどうやってまくのが大事と感じます。

柴田委員長：ありがとうございます。顔見知りの関係性を地域に多様につくっていく。その中には、色々なチャンネルがあるんですけども、対面できっかけになるものもあれば、例えば今回の「Afterコロナ」の在り方として、オンラインでZoomでつながるとか、そういった方法もあったりとか、色々な方法、考えができそうな気がします。ありがとうございます。

「おやじの会」の活動で私も思い出したんですけども、川崎市の活動を見学させていただいたことがありまして、お父さんたちがとにかく飲み会が好きで、子どもたちの活動ももちろん大切なんですけれども、自分たちの異業種交流の中での飲み会をすごく楽しんでいるなという。それで、お母さんたちはちょっと呆れながら見ているんだけど、でもすごく頼もしい存在として、子どもたちを思い切り遊ばせたりとか、例えばお母さんたちだけでできない火を使ったような遊びですかね、火で、牛乳パックでホットドッグとかを焼いていたとか、ドラム缶の五右衛門風呂を体験するとか、スキーなんかにも連れて行って、怪我をしたらどうするとお母さんが言っても、「おやじの会」の方たちは、怪我なんかどこでもつきものだ、とやっていて、PTAではできないような活動をしていて、そこにお子さんたちが積極的に楽しんで活動していて、3・11の震災があったときも、川崎の「おやじの会」の方たちが子どもたちに投げかけて、何かできることを考えるという募金活動をしていたりというようなことを見させていただいて、そういう生きたロールモデルというんですかね、大人との触れ合いという、またすごくダイナミックな触れ合いの仕方を見たなという風に思いました。

前川委員：今、米田委員のお話や柴田委員長のお話を聞いて、私が「わくわくプラザ」で働いていたときのテーマが「大学生の僕を知ってもらおう」というものでした。

「わくわくプラザ」で私が長く働いていたときに、人手が足りなくて、たまたま私の友人で保育園の先生をやりたい友達がいたので、うちの学童にアルバイトに来なよとあって、女子だったんですけれども、来てもらって一緒に働いていたんですけれども、ある日その女の子が髪型を変えてきた、髪を切ってきたんですね。バイトしていたら、男一家の家族に生まれた野球少年がその女の子の前に来て「何か違う、何か違う」と1人で叫んでいるんですね。その女性スタッフも困って「えっ、えっ」みたいな、何が違うのみたいな。その時は凄くわたわたして、結局、何だったのかなと振り返ってみると、その女性スタッフが髪を切ったことが何か違うということで、それが髪を切ったんだねということが多分言えなくて、おそらく男一家の家族で生まれているので、女性が髪を切って綺麗になったとか可愛くなったと表現ができないんだなと思って、それがそういう表現ができないで、多分「何か違う」しか言えなかったんだろかなと後から気づいて思ったんですけれども、そういう意味で、色々な人と触れ合うことで、その人の、その子の視覚とか視点とか色々なものが豊かになるのではないかなと思って。特に小学生だと、触れ合うとしたら30代、40代のお父さん世代だったり、それから学校の先生も、若い先生が最近いますけれども、多分自分のお父さん、お母さん、もしくはもうちょっと上の先生という可能性が高いと思うので、そういう意味で、やっぱり20代とかとなかなか触れ合う機会が小学生はないなと思っていたので、20代の大人が本気を出すと、こんなにスピードが速いんだぞみたいな、ゲームもこんなに上手いんだぞみたいな感じで僕は一生懸命やっちゃうんですけれども、そういう顔見知りや人見知りのそういう輪が色々なところで広がっていくと、コロナ禍の孤立してしまいそうな時期でも、ああ、そういえばあの人は元気かなみたいな、そういうつながりがあるといいのかなというのを、今聞いていて思いました。

柴田委員長：ありがとうございます。やはり人と人とのつながりというところは大きなキーワードになりそうですね。

香山委員：あと20分しかないというので、今度の3月下旬の全体会までに一応何かしらの協議題の文言が必要なのかなと思って、叩き台として今考えていたんです。必要であれば、それをどんどん皆さんで議論してもらって、違ったものになっても構わないので、まずは仮案として発表させていただきます。

『社会参加の新たな可能性と期待される支援の形 ～Withコロナ、Afterコロナを生きる青少年に託す～』

多分皆さんがおっしゃっていた、今までにない、できたことができなくなっていたりとかという、そういうピンチをチャンスに変えるというようなお話もありましたので、そういうものを含めて、あと居場所に関する文言がなくなっているのかなと思うんですけども、社会参加とか次世代の在り方という事務局

がつくってくれたものを一応取り入れたつもりです。

柴田委員長：皆様の議論をまとめてくださいます、ありがとうございます。今、香山委員から御意見をいただきましたけれども、こういうキーワードを新たに入れた方がいいのではないかと、皆さん自由に御意見を挙げていただければと思います、いかがでしょうか。

芳川会長：全体会に向けて協議題をまとめるには、もう少しキーワードが必要なのかなという感じもしています。例えば、今日お話しした点と、あと前回の資料の中のどのキーワードを私たちは採用したいのかとか、例えば「こども文化センター」を入れるのかどうかとか、「居場所」を入れるのかどうかとか、「次世代のあり方」を入れるのかどうかとか。多分もう少し絞っていかないと、あまりに漠然とし過ぎてしまうと、全体会の他の委員からも色々な意見が出てきてしまうのではないかなという気がしますし、協議題ではありますので、広過ぎてしまうと、後で起草委員会で修正するのが多分かなり大変な感じになってしまうのではないかなという気もしますので、もうちょっとキーワードが皆さんから出ると、少しずつ形が出来てくるのかなと思いますが、いかがでしょうか。

前川委員：今回、やっぱり関係者の生の声を聞いたり、それから担保の実行可能性、取組の実行可能性を担保する、そして目的や意義を明確にするといった意味で言うと、また、ここまでの議論からすると、「こども文化センター」ないしは「わくわくプラザ」といった文言が入ってきた方がより具体的な提言になり得るのではないのかなという気が私はしていますが。

館委員：しつこくて申し訳ないんですけども、何のためにというところをしっかりと見据えて話をするのが大事かなと思っていて、「こども文化センター」も私は手段の一つだと思っているので、もちろん皆さんが同じ考えの下で、やっぱり「こども文化センター」だねということであれば、私は別にそれに対しての異論は特には無いんですけども、例えば「Withコロナ」「Afterコロナ」の話もそうなんですけれども、「Withコロナ」「Afterコロナ」の対応というか、託すことを考えるにしても、その託す先に結局何があるかというところだと思えます。もう少し目標というか、社会参加の先にあるものが具体的なキーワードとして入ってくると、もう少しこども文化センターの位置づけも明確になるし、テーマとしては非常に理解しやすくなるのではないかなと思います。

ただ、申し訳ないのは、私自身、何か具体的にありますかというところなんですけれども、子どもたちにどんどん社会に出て行ってよと思う我々大人の思いは何なんだろうというところだと思えますね。やっぱりそれって、今、川崎で話題にしているんですけども、川崎のまちをよりよくしていこうとか、住みよいまちづくりを目指していこうとか、結局根本はそういうところにつながっていくのではないかなと思えます。ただ、よりよいまちづくりといっても

それ自体はものすごい漠然としている話なので、もう少しそこに対して具体的にキーワードという形での落とし込みは必要だと思うんですけども、いきなり住みよい川崎市を目指して社会参加をというのだと、住みよいまちって何だろうという話になってしまうので、何かそういったところでもう少し具体的なキーワードを引っ張ってこれたらいいのかなと思いました。

米田委員：今、館委員がおっしゃったこととも関係があるのですが、何を目的にするかというところで、私は、若者が「生きていることって悪くないな」とか「社会って捨てたものではないな」と思えることがすごく大事だと思っていて、そう思えるための根っこに川崎という町があった。そういう風に生きていってくれたら嬉しいと思います。生きていくと、様々なライフステージがあるので、自分の意思とは別に川崎を離れる必要がある時もありますが、自分のアイデンティティーの中にちゃんと川崎というまちが位置づくし、何かの時には思い出すし、大事にしたいものと思って生きていく。その時に、どんな人に出会ったとか、どんな経験をしたとか、自分も捨てたものではないという思いができたとか、そういう機会をどれだけこのまちの中でつくれるかを私はゴールにしたのかなと思いました。

柴田委員長：ありがとうございます。私の個人的な意見で、また、米田委員が今おっしゃったこととも関係するのですが、子どもたちの自己肯定感を育むということが一番今は重要なときなのではないのかなと思います。やっぱり自尊感情とか自己肯定感を持っている子どもというのは大人になっても打たれ強いですし、何か困難があっても何か光を見出して立ち直ろうというようなお子さんで、そういう子どもを育む地域をつくるためには、今まで皆さんと議論してきたように、顔見知りの関係性の中で地域の保護者や教員以外の大人たちにもしっかりと見守られ、支えられて生きてきたというような実感を持つ子どもを地域で育てたいというような思いはあります。

丸山委員：私も同じようなことを考えていて、まちを愛することとか、まちをつくるというと、そのプロセスもあるんですけども、その先に何かあるかということ、我々がここで考えていることは、そのことを通して子どもが本当にこのまちで安心感をもっと持つことだったりとか、これも月並みなんですけども、子どもが成長していったりとか、色々な人とコミュニケーションをすることによって、たくましくなるというか、そういうことかなと思うんですね。ですから、子ども自身の成長であるとか、子どものしっかりとした自立性とか主体性をつくるということとか、あるいは子どもたちが安心感を持ってこの地に住むというような、そういったキーワードは入れた方がいいかなと感じました。

柴田委員長：ありがとうございます。キーワードは幾つか出てきたように思いますが、ここではキーワードを出すだけでは、やはり足りないのですよね。

事務局：協議題の副タイトルまでは、例年であれば決めなくてもいいのかなとは思っているんですが、いつもであればタイトルの案は決めています。今出していただいたキーワードを元に仮でタイトルを決めてしまって、全体会までの間に何度かメール等でフィードバックさせていただきながら、各委員に手を入れていただく、というようなこともできなくはないかなとは思いますが。

芳川会長：仮タイトルという形で大きく出していて、キーワードのところで大体こういうことを考えていますよみたいな、そうするとおよそのイメージが全体会の他の委員にもつくかと思しますので、それに関して皆さんからさらに意見をいただくという感じの全体会になるのではないかなと思います。

先ほどキーワードというところで、皆さんの発言を聞いていて勝手に幾つか考えたんですけども、まず「こども文化センター」というのが1つ、次に多分、私はすごくいいなと思ったのは「心のふるさと川崎」、多分それでしょうという感じがしていて、そして3つ目は「出会い」や「体験づくり」、いわゆる「顔の見える関係性」。そして4つ目が「自己肯定感」で、5つ目が「Withコロナ」「Afterコロナ」になるのかな、という感じがしたんですけども。

柴田委員長：的確にまとめていただいて、ありがとうございます。

前川委員：グーグルのCMで「近所は宇宙だ」というのがありますね。グーグルで、近所の、例えば食べ物の名前を検索すると、近所の色々な美味しいものが見つかり、要は自分の知らない世界が近所に広がっているんだよと、グーグルを使うとそういうことが分かるよというCMなんですけれども、まさにまちは日々生きているもので、新しいお店ができたり、新しい人が引っ越してきたりとかという意味で、ある種そういう意味で「宇宙」という言葉をグーグルは使ったんだと思うんですけども、生きているまちの感じが「心のふるさと」として息づいて、それが好きになってもらえることがいいなというのは思っているので、今まで皆の委員がおっしゃっていたことに私も賛成いたします。

事務局：「こども文化センター」とか、「出会い」とか「体験づくり」とかというのは、どちらかという手段「How」の話だと思うんですけども、「心のふるさと川崎」とか「川崎を愛する」とか、あるいは「自己肯定感」というのは、どちらかという目的というか、何のため、「Why」というか、向かっていく方向なのかなと。「Withコロナ」「Afterコロナ」というのは、もうまさに現在以降、これからの環境の話なのかなということを考えたときに、逆に言うと「こども文化センター」や「体験づくり」というのがタイトルになると、手段ありき、みたいになってしまふ部分もあるのかなという気はしますので、メインのタイトルということであれば、どちらかという「心のふるさと」であったり「自己肯定感」であったりした方がふさわしいのかな、取組の意義を明確にするという進め方を重視するの

であれば、そちらの方がより適切かなという風に感じます。

柴田委員長：例えば「青少年が自己肯定感を育む心のふるさと川崎」とか、ある程度は大きなタイトルの方が。

事務局：そうですね。ある程度大きなタイトルの方が、その後の議論の幅は広がっていくのではないかなと思います。

芳川会長：すごくいい感じがしました。

米田委員：すみません、まとめる方向に異議はないのですが、青少年が生きていてよかったと思えるような、そのくらいのやわらかく深めの、コロナ時代で、命の話題が身近にある中で、そんな感じの言葉は入れられないですか。

館委員：そうですね、私も「自己肯定感」と入れてしまうと、今の青少年にむしろ否定しているというか、今の子ども、青少年が自信がないからこういうタイトルをつけたと感じる部分が出てきてしまうと思って、それだったらポジティブな表現として、例えばですけれども、「青少年の夢をかなえられる、心のふるさと川崎を目指して」みたいに、表現をちょっと変えてもいいのかなとは思いました。

柴田委員長：「青少年の夢をかなえられる」ですね。

米田会長：私は「夢」という言葉が入ることに少し抵抗があって、夢どころではないと思っている子たちもいることを思うと、タイトルに入れるのは辛い気がします。夢を持たなければいけない、という圧を感じるというか。自分自身が整って初めて、その次の一歩として夢が持てるのではないか、という感じがするので。

事務局：そういう話を聞くと、「青少年が生きていてよかったと思える心のふるさと川崎を目指して」だとか、そういう感じでもいいのかもしれないですね。

館委員：その途中の部分は取ってしまってもいいかもしれないですね。「青少年の心のふるさと川崎を目指して」とか。「夢」とか「自己肯定感」は敢えて入れないで。

事務局：そこの「心のふるさと」の中に、本当に何もしなくても「生きていてよかった」と思えるという意味合いもあれば、それこそ「夢をかなえるため」に何かを積極的にやってもいいという意味合いも含められるのかもしれないとは思いますがね。

柴田委員長：大きなタイトルとしては『青少年の心のふるさと川崎を目指して』ということになって、今回の協議題の対象となるのは、今までの議論にもあったように、いわゆる家庭で子どもの貧困問題の対象とされるようなお子さんたちも

含めて、そして次世代のリーダーになり得るようなお子さんたちも含めてという、幅広い層のお子さんたちを含めた提言書を作る方向性ということでしょうか。副題に「Withコロナ」「Afterコロナ」、あるいは「社会参加」などといったキーワードを入れるということでしょうか。

(異議なし)

柴田委員長：皆様、御協力いただきましてありがとうございました。

(2) その他

- ・事務局から、全体会の日程及び起草専門委員の選任予定等について報告

3 閉 会

事務局：柴田委員長、そして委員の皆さん、ありがとうございました。私はなかなかオンライン会議とかは慣れないんですけども、やはりリアルな会議は良いですね。それぞれの思いというか、知見というか、それが重なり合い、響き合うリアルな会議はやっぱり良いかと、今日お聞きしていて改めて思いました。本当に良い形で議論をまとめていただいたので、事務局としても精いっぱいフォローしていきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。